



東京消防庁
小石川消防署
予防課予防係主任
消防司令補

黒田翔一

くろだ しょういち

1984年6月25日宮城県生まれ。宮城県立古川高校卒。2007年、専修大学法学部卒。東京消防庁勤務。3人の子の父。家庭では料理や洗濯、掃除も手際よくこなし、妻からは「主婦みたい」と言われることも。

人がやらないようなことでも、 やってみる。そして考える。

地方から上京した黒田さんの大学生活は、新聞配達と消防団で始まった。その2つを通して得られた、街の人たちとの触れ合い。いわゆるキャンパスライフとはちょっと違う。でも「やってよかった」と誇れる大学生活。かけがえのない時間は黒田さんの血肉となって、消防官として働く今に通じている。

東京消防庁に勤務して11年目。火災現場で消火活動を行うポンプ隊員を4年間務めた後、予防課に配属。現在は火災を予防するのが仕事だ。

「たとえちょっとしたボヤでも、部屋はすすけ、臭いがついてしまい、原状回復するのも大変です。嫌な記憶も残ります。何よりも火災そのものを起こさないことが大切で、そのためにできることはいろいろあります」

午前は署内で事務処理、午後は建設中の建物やテナント入れ替えのため改装中の現場に足を運び、消防上の安全性を検査する。古い建物の中には、法令が変わり現在の基準では違法状態になってしまった

「既存不適格」の建物もある。

「それまで普通に使ってきたものを違法と言われて、納得がいかないという人もいます。法律の話だけではなく、相手の気持ちも考え、安全性の面から説明させていただく。改修にはお金がかかるので、時には何度も足を運んで話を進めます」



新聞奨学生と消防団で 多くを学んだ大学時代



宮城県の片田舎で生まれ育った。都会に出て、広い世界を知りたいと思い、専修大学法学部に進学。親からの仕送りは一切受けず、新聞奨学生としての生



↑学生時代は消防団に所属。ポンプ操作大会で放水の技術を競う
(中央2番のゼッケン)



↑小石川消防署予防課(後列左から3人目)



↑日本武道館での卒業式(右から3人目)

≡ やってみるという精神、今も生きる ≡

「新聞奨学生をやるに当たり、親からは大変だからやめとけ、と言われました。でも、やってみないとわからないこと。消防団に入るときも販売店の所長さんからは、付き合いが大変じゃないのって心配されました。でも、やってよかったという思いしかない。

周りからのネガティブな情報だけでやめてしまうのでなく、やったうえで考える。それは今も生きています。人がやらないようなことでも、何でも進んでやってみる。やってみた者にしかわからないことは多いですから」

今年2月、3人目の子供が生まれるに当たり、1カ月間の育児休暇を取得した。男性の育児休暇取得は社会的にはまだまだ少数だが、これについても黒田さんの考えがあった。

「バリバリ働いて、どんどん偉くなって、給料も上がるというのは、ひと時代前のライフスタイルには合っていました。でも、今は多様な価値観があり、いろんな家庭があります。

私は職場でちょうど真ん中の世代です。上の人たちと下の人たちの間に入って、より働きやすい環境を整えられればと思っています。そのためにはまず自分が経験してみないと。

例えば自分の部下の女性が結婚して子供を持つことになったとき、自分が経験したことでないと、どのような働き方ができるかというのも実感をもって、親身になって考えてあげることができないと思っています」

仕事を通し、実現したい夢があるという。一つは、住まいや店舗など、すべての人が安全に安心して使えるようにすること。そして、もう一つは、働きやすい職場環境を作ること。一つ一つ着実に、実現に向けて進めている。

活を始めた。

新聞奨学生は朝夕刊を配達することで、入学金、授業料、住居が用意されるほか、少なからぬ給料も支給される。その分、仕事は楽ではない。

夜中の2時に起き、前日に準備したチラシの束を新聞に挟み込む。それを自転車に積んで3時に出発。担当の320軒に配り終えて6時。朝食をとり、大学へ。授業を受けて、また午後3時には夕刊を配り始める。

いわゆる大学生らしい生活ではなかった。しかし、周りの学生を「羨ましいと思ったことはない。

配達地域は東京都世田谷区にある昔ながらの商店街だった。「一軒目のお茶屋さんに夕刊を届けると、かならず美味しいお茶を一杯出してくれて…」、懐かしい思い出はたくさんある。

地元の消防団にも入り、町会の人たちと一緒に夜警をしたり、放水活動の練習をしたり。地元のお祭りに駆り出されるなど、どんどんと人の輪が広がった。

「周りにはみんな年上の人たちばかりで、その中でいろいろな社会のことを教えてもらいました。自分にとってはサークルのようなものでした」

3年次からは新聞奨学生をやめ、2年間で蓄えた貯金を使って予備校とのダブルスクールで消防官試験の勉強に専念した。高校時代に消防官をしている親戚から仕事内容を聞き、あこがれていた職業。勉強のかいあり、第一志望の東京消防庁に合格した。